

『東京タワー』2002-2003年
黄ボール紙にパステル、クレヨン、墨汁
760×350mm



『無題』2001年 紙にパステル、クレヨン 500×450mm



Hirotaka Hatana
畑名 祐孝
1976年～ /滋賀県在住

畑名さんの作品は、太い黒のラインと、カラフルに塗り込んだ大胆な色面とが織りなす力強さ、生き生きとしたユーモラスなニュアンスが魅力的です。彼の描画のプロセスは、本人にしかわからない法則で成り立っています。まず、描きたいものの形を筆と墨汁を使って数秒で描きます。次に、墨汁の残りを全部手の平に塗り、その真っ黒の手を水道で洗い、机に戻るとクレヨン塗っていきます。続いて

堅いハードパステルに持ち替えてその上から再び塗っていくので、クレヨンは削り取られてしまいます。そのクレヨン粉を集めて、手の平に塗りたくり、または水道で手を洗うのです。最後にモチーフの背景をソフトパステルで二度も繰り返し塗っていき完成。すべての絵はこのルールを踏んで描かれています。

その結果、初めの描画はつぶされてしまい、力強い大胆な形と奔放な色調だけが残って

ゆくのです。絵の横に最初に描いたモチーフ名の文字が、かろうじて作品の手がかりとなります。

彼は、様々なものに対して自分だけの強いこだわりの法則を持っています。絵のモチーフの中でも「東京タワー」には強い愛着があり、繰り返し描いています。その他、動物や身の道具類なども彼流の独創的なカタチに描かれてゆきます。(はた よしこ)



『イカ』1996-2001年 白ボール紙に墨汁 801×1103mm



Koichi Fujino
藤野 公一
1944年～ /滋賀県在住

りんご、ねこ、さかな。それらを象徴する形を図案化しているかのように、画用紙いっぱいに描き、墨で塗りつぶしています。それは何を表しているのか、誰にでもわかるといったような形。

絵とは、独創性をあふれさせることのできる非常に自由な世界ですが、藤野さんの場合は「形」さえわかれば、それ以外のものなど必要ないともいうように、同じ絵を何枚も、何

枚も描いています。おそらく「りんご」の絵だけでも2000枚はあるでしょう。

彼が絵を描き始めた頃は、墨で塗りつぶすというスタイルではありませんでした。クレヨンやペンを使って、ひとつひとつ色を変えて一辺1~2cmの四角形をいくつも描き、完成させるのに1年かかっていたのです。それを1~2年続けていたある時、墨一色で1日に何十枚と描くスタイルに変化しました。その劇的な



『たこ』制作年不詳
白ボール紙に絵の具
800×1100mm
(作品写真撮影:高石巧)

変化について彼自身に聞いても明確な答えは返ってきませんが、紙にすぎ間なく描くというスタイルには変わりはありません。

確かめたいこと、聞きたいこと、言いたいことがあふれ出てくる生活の中で、彼は非常にシンプルな絵を描いています。

(井上 多枝子)